厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
研究報告書

フォーカス・グループ・ディスカッション法による障害児ケアに関するニーズ調査

研究協力者　中村安秀　大阪大学人間科学部

研究要旨：現代の母子を取り巻く多様なニードに対応するためには、単なる量的評価だけではなく、質的評価も重要視されなければならない。国際保健分野において、文化社会背景の異なるフィールドで住民のニーズや意識を把握するための手段として頻用されているフォーカス・グループ・ディスカッション法（ＦＧＤ）により、障害を持つ親のニーズを調査した。その結果、ＦＧＤは具体的なあらかじめ回答が用意できない潜在的な意識を調査するには非常に優れた技法であり、地域における障害児とその家族の意識やニーズを調査するには非常に適切な調査方法であると考えられた。

見出し語：フォーカス・グループ・ディスカッション、障害児、ニーズ、質的分析

Ａ　はじめに

住民のニーズは生活水準や住民意識に伴い変化しており、現行の種々の母子保健施策が変化しつづける家庭や環境に対応できているのか、単なる量的評価だけではなく、質的評価に基づいた検討が必要である。

Ｂ　研究の背景

ＦＧＤ（Focus Group Discussion：グループ・インタビュー法ともいう）は、マーケティングリサーチや国際保健分野において最も多用されている質的分析方法の一つである。

ＦＧＤの一般的なデザインは、数人の対象者を選定し、インタビューのテーマは決めておくが、あらかじめ設定された回答を用意せず、個人の自由な発言と発想に基づきインタビューが実施される。インタビュー結果の解析においては、代表的な意見や問題点を抽出するだけでなく、調査前には予想もしていなかった新しいコンセプトが見出だされることもある。また、事例数が少なくても実施可能であるため、マイノリティーの意見やニーズを科学的に評価し、プロジェクト活動に反映させることができる利点がある。

Ｃ　研究方法と対象

障害を持つ親のニーズを調査するために、３地域で６回のＦＧＤを行った。実際の手順は以下の通りであった。

・メンバーの選定方法を決める
・インタビュアーの選定
・インタビュー・ガイドの作成
・ＦＧＤメンバーの決定
・ＦＧＤの実施（約1.5時間：テープ録音）
・データ分析

実際には、以下の対象に対して計６回のＦ

ＧＤを実施した。

地域	疾病	メンバー数	児の年齢
宮古	脳性麻痺	４人	幼児小学生
	自閉症	７人	幼児小学生
鳥取	自閉症	８人	学齢前
	自閉症	９人	学齢前
府中	ダウン症	６人	学齢前
	脳性麻痺	７人	学齢前

なお、テープ録音も含め事前に了解を取り自主的に参加してくれた人をＦＧＤの対象にしたので、倫理面での問題はない。

Ｄ　研究結果

データ分析の結果、宮古では脳性麻痺をもつ子の親は周囲の人の目を非常に気にしていること、自閉症および自閉傾向をもつ子の親は頻回の言語訓練を望んでいることが明らかとなった。府中のダウン症においては、地域における具体的な保健福祉情報の提供、包括的な保健医療サービスの場の提供、ワーキング・マザーなどへの公的なサポート体制の整備などが親のニーズとして浮上した。鳥取の自閉症児をもつ親の多くは、乳幼児健診後のフォロー時において早い段階での診断の告知を望んでいた。また、自閉症児をもつ親の共通の悩みとして、障害のことを理解してくれる理髪店が少ないことがあげられた。

Ｅ　考察と結論

このように、ＦＧＤは具体的なあらかじめ回答が用意できない潜在的な意識を調査するには非常に優れた技法であり、地域における障害児とその家族の意識やニーズを調査するには非常に適切な調査方法であると考えられた。今回の調査結果から、ＦＧＤの特徴は次のようにまとめられた。

１）調査にかかわる費用が比較的安い

２）対象集団のニーズと意識を質的に把握できる（脳性麻痺と自閉症ではニーズや意識に違いが見られた）。

３）グループ・ダイナミズムにより個々のインタビューよりも深い理解が可能である（参加者からも、自分たちの意見が整理できたと好評であった）。

４）きちんとしたインタビュー・ガイドの作成が重要であることがわかった。また、良質のインタビュー・ガイドを作成することにより、インタビュアーの資質に左右されずに結果が得られると思われた。

５）各地域における脳性麻痺児や自閉症児の親という母集団の小さな集団においても、地域ごとのニーズを知ることが可能であった。今後は、いろんな疾病に対して応用可能であると考えられた。

Ｆ　研究発表（学会発表）

１　中村安秀、渡邊雅行、當山紀子、恩河尚清、小枝達也、前田秀雄、日暮眞．フォーカス・グループ・ディスカッションによる障害児ケアに関するニーズ調査．第46回日本小児保健学会（札幌）　1999年

２　中村安秀、渡邊雅行、當山紀子、恩河尚清、小枝達也、前田秀雄、日暮眞．保健医療ニーズに対する質的調査としてのフォーカス・グループ・ディスカッション法の有用性．第58回日本公衆衛生学会（大分），1999年